

協働取組ガイドライン（仮称）について

発言者	発言内容
事務局	(資料1、資料2-1、資料2-2に基づき「協働取組ガイドライン（仮称）」に関するスケジュール、構成案、掲載事例案等について説明があった。)
千頭会長	議論に入る前に、豊田市環境政策課に事例を紹介していただく。
豊田市 環境政策課	(資料2-3に基づき「環境学習プログラムカレンダー」について説明があった。)
千頭会長	豊田市の事例について、質問等はあるか。
大鹿委員	<p>豊田市は、様々な施設やフィールドを学校が活用する際の移動手段も支援している。これを県レベルで見た時、他の市町村が豊田市の事例の中から何が使えるのかということも模索する必要がある。</p> <p>このカレンダーは大変役立つが、学校が施設に行くだけでなく、学校に来てもらえるようなプログラムもあれば、他の市町村にとって参考になるのではないか。</p>
豊田市 環境政策課	<p>豊田市では、小中学校を対象に、一部の環境学習施設を訪れる場合のバスの予算を確保しており、年間約50件の利用を予定している。利用した教員からは、「移動手段の確保に困って授業を断念することがなく、大変助かっている。」という言葉を受けている。</p> <p>また、教員からの要望を受け、学校周辺の生き物調査等の出前講座を豊田自然観察の森に依頼して実施している。その他の施設でも出前講座を実施しているところがある。</p>
篠田委員	小学校が環境学習施設を利用する場合、1学年全員となると100名ほどになることもあるが、バスでの送迎は最大何名まで可能なのか。
豊田市 環境政策課	豊田市ではバスを2台手配しており、2度に分ければ約160名を送迎できる。
新海委員	体験学習はこれから必須であり、子どもたちが現場に行く機会を増や

	<p>すことは非常に重要である。先生たちの困りごとに応えていくという意味では、この取組は非常に役立つが、それだけではなく、現場での体験によって、先生たちが授業づくりをもっと楽しく感じたり、子どもたちが授業にもっと食いついてくるような形になったりすることが重要だと考える。これがあるから使えるというもう一歩先に、アドバイスする人材がいたり、先生たちがもっと応用力をもって授業づくりができるように導く仕組みが必要なのではないか。</p>
<p>豊田市 環境政策課</p>	<p>様々なところで ESD や環境学習に関する研修や勉強会が開催されていることを教育委員会から伺ったりしているので、専門的なところは専門的なところにお任せしている。</p> <p>しかし、環境学習施設が一番現場に近く、先生と話す機会も多いため、環境学習推進校の意見交換会として、小学校の先生と施設の担当者が直接話して相談する場を設けている。</p>
<p>千頭会長</p>	<p>豊田市では、こどもエコクラブなども活発で、地域ぐるみで子どもたちの環境学習を年間通じて応援する仕組みができており、実績がある。こうしたことも土壌としてあるのではないか。</p>
<p>松岡委員</p>	<p>小学生向けの環境学習プログラムということだが、幼稚園・保育園等でも活用できるのか。</p> <p>また、教育委員会と連携しているということだが、幼稚園やこども園に関する部署と連携はどうか。</p>
<p>豊田市 環境政策課</p>	<p>多くの環境学習施設が小学校向けのプログラムが主となっているが、中には幼児も参加できるプログラムもある。</p> <p>積み木で地域の木材に触れて森林の大切さを学ぶ事業など幼児向けのものでは、認定こども園の園長が集まる会などで、環境学習施設が行う出前講座の紹介などを行っている。</p>
<p>千頭会長</p>	<p>豊田市環境政策課の事例についての質疑応答については以上とします。</p> <p>協働取組ガイドラインについての議論に入りたいと思う、意見等をいただきたい。</p>

大鹿委員	<p>ガイドラインの読者として連携・協働の経験があまりない学校や事業者の方が想定されるので、構成は案の3が良いと考える。</p> <p>初めて協働して実施するにあたり、環境学習を提供する側がとりあえず1時間入ってみようと考えた時に「このように入れる」という案が最初に見えると良いと思う。まず1時間実施して、良さに気付くことで協働が進んでいくと思う。</p> <p>それに加えてテーマや、1時間で行える内容が分かると取り組みやすいと思う。</p>
加藤委員	<p>案の1、2、3を統合していく形にしてはどうか。例えば、テーマがあり、その中にコマ数や発達段階が見えるような形にすればよいのではないか。</p> <p>発達段階に分けた場合、中学校で実践したことであっても小学校で実施できるかもしれない。そのため、大まかに分類して、読者が選んで読めるようにしてはどうか。</p>
篠田委員	<p>細かく細分化していくことは、親切なようで全体を見えなくしてしまう。全体を見て、その中で自分たちにあったものを見つけ出していく形にした方が良い。最初から細分化されていることで、1つの問題だけに目が向き、環境という問題の全体が見えなくなるおそれがある。</p> <p>全体が見えて、部分も見ることができるよう形にできると良い。</p>
菅沼委員	<p>どの案であっても事例として紹介する内容は変わらないが、学校をサポートする側がガイドラインを読む場合、どのような順番で事例を並べることが効果的なのかという観点から、例に挙げられているようなものが良いのか、それともアトランダムに並べたほうが良いのか、ご意見をいただけるとありがたい。</p>
百瀬委員	<p>学校をサポートする側が見た時に、自分たちができることを学校でどのように使ってもらえるのかが分かると良い。</p> <p>事業者が「こんな事ができる」と発信しても、学校での活用方法が分からないと、学校からは声がかかりにくいと思う。学校が見たらこれに参加できるということが分かるような形になると良いと思う。</p>
橋本委員	<p>資料2-2に挙げられている案は、ガイドラインの大見出しになるものだと考えている。</p>

千頭会長	<p>例を挙げると、EPOC の環境教育講座ではテーマごとに掲載している。企業の専門分野は様々であるため、大見出しとしてのテーマがあったうえで、その下に小見出しとして発達段階や関わり度合いがあると良いのではないかと感じた。</p> <p>事業者・NPO・大学・行政等向けのガイドラインについて、目的が明確ではない気がする。「学校等のニーズに応えられるような体制作り」を目指すことが書かれているが、「学校等のニーズ」として企業に何が求められているのかがはっきりとしていないと、ガイドラインが作りにくいのではないかと感じた。</p> <p>ここまででは、提供する側としてはテーマがスタートだと良いのではという意見、学校側としては必要としている情報は自分で探せるのではという意見があった。しかし、全ての先生が必要としている情報を見つけられるとは言えない。豊田市の事例のように詳細に説明している事例もある。</p> <p>尽きない議論ではあるが、事例の入り口としてどのようにスタートするかであって、三者択一というものではないと思う。</p>
新海委員	<p>ガイドラインの目的は、提供者側から見た場合は、提供者が持っているノウハウやスキルを学校教育に活かすことで、子どもたちの学びを深めることである。学校側から見た場合は、外部の人とつながることで、教員が授業づくりが楽しくなり、子どもたちの学びが深くなることだと考える。</p> <p>事例の掲載順についてはどのような形でもよいと思っているが、大事なことは、先生と外部の人が出会って何が変わったのか、授業づくりの中で何がポイントとなったか、が書かれていることである。テーマ、発達段階、関わり度合いなどどのパターンでも良いが、どのように示すかが難しい。ニーズは多様であり、どれか一つにすると見えにくくなり、見ない人も出てくるであろう。その回避のためにインデックスのようなものをつけてみてはどうか。</p> <p>また、学校と事業者・NPO 等がそれぞれ必要なものが異なる中で、コーディネーターがいない場合には、それぞれどういうガイダンスやコメントがあれば連携・協働の推進につながるかという点で検討すればよい。</p>
平井委員	<p>提供者向けの目的やねらいがはっきりしない。これを見て、専門家の</p>

	<p>方が関わっていただいたからこんなに学校や子どもが変わったという事を提供者側に理解いただき、もっと協力していただけるよう広げていくねらいがあるのか、マッチングを上手にさせて活用促進を図るねらいがあるのか、基本的なコンセプトをはっきりとさせると構成も固まってくるのではないか。</p> <p>学校向けについても、協力していただける様々な団体があるにも関わらず十分進んでいないという実態を踏まえると、「こういった活用をすることでこんなに子どもが変わった」ということが伝わるような紙面構成が必要だと感じた。</p> <p>また、環境教育という教科があるわけではないため、総合的な学習の時間であっても、環境をテーマを扱っている学校がどれだけあるかを考えると、複数時間がかかるようなものを示されてもハードルが高すぎて特別な例と捉えられてしまうのではないか。総合的な学習の時間だけでなく、豊田市の例のように教育課程に基づいた教科領域の中で専門家に関わってもらうことで、こんなに効果的な授業ができるということが伝わると良い。</p>
百瀬委員	<p>先生とプログラム提供者のコミュニケーションが大事だと思う。自社では、約一か月前に先生と打合せをするようにしている。提供者はプログラムが実施できるようにという目的で行くことが多いが、どのような目的で依頼されたのかを掴めると効果が出る。</p> <p>また、プログラムのレベルが合っているかという問題もある。提供者の実施したプログラムが、先生が期待した通りか、また、授業の単元にふさわしいものであるかということである。先生方の期待にどう応えられるか、プログラムを実施する側は勉強をしなければならない。</p> <p>例えば EPOC では次世代交流分科会で自主勉強会を実施し、コミュニケーションの取り方や、専門家を呼んで学校と児童館の違いなどを学習した。提供者側も踏まえておくべき情報や求められるレベルがないと不安であるから、そのような事がガイドラインにあるよい。</p>
渡辺委員	<p>学校で教える時には、同じことを教えるにも発達段階によって扱うものが異なる。そのため、「何を教えたのか」、そして「そこにはどのレベルのものがあるのか」ということから考えると、学校向けのガイドラインについてはテーマごとに並んでいると見やすい。また、協働を実践するにあたり、他の学校も実践している事例が多く分かったと実施しやすい。</p>

加藤委員	<p>ガイドラインを作ったら、私たちのような教員が研究会などで伝えていくといった草の根的な活動も大事である。</p> <p>協働取組を実施する単位も大事である。環境という教科はない、そのため理科や社会に入ってくるかもしれないが、部活動など小さな単位で参加できるような方法があると良い。</p> <p>事業者等と協働して実践すると、学校側のニーズとずれていることもある。それを改善するためには、やはり事前の打ち合わせが大事だが、そのような時間を用意するのは難しい。そのため、コーディネーター等の存在はとても重要だと思う。</p> <p>ガイドラインの構成については、事業者などはやはりテーマごとが使いやすいだろうと思う。学校側としては、テーマ・発達段階・関わり度合いをすべてふまえていただけると良い。</p>
千頭会長	<p>環境教育を提供する側のガイドラインであっても、自分たちのプログラムが学校のどこの段階でどのように活用できるかのイメージができないとミスマッチにつながるかもしれないので、その関連付けを見せた上でということになるだろう。</p>
事務局	<p>見せ方によって冊子を開いてもらえるかが変わると思い、この案の1から案の3を用意した。</p> <p>「企業に対して何が求められているのかが分かるように」ということについては、ある外部講師のコメントを引用すると、「学校が生徒に伝えたいと願う内容について、自社の強み・特徴を活かし、実物や実体験に基づいて実感を伴って伝えられるよう、常に心掛けている。学校現場での環境教育支援は、クライアント（学校）からの要望という課題解決のために自己のスキルを使う、企業人にとってとてもやりがいのある、そして得意とする分野である。」とある。ここに企業に求められていることや、企業やNPO側にとってのメリットが表れているのではないかと考えている。NPOもそれぞれの特定の分野でいろいろ活躍されてきたその経験や知識や様々なものを、学校教育のために役立てることができるといふ事に、やりがいを感じていただけないかと思っている。そういったコメントから、導入の企業・NPOのメリットを示していけたらと思っている。</p> <p>そして、外部の専門家が学校の中に入ったことで、こんなに子どもや教員が変わったという姿を示していけるようにしたいと思う。また、そ</p>

千頭会長	<p>のためにどうしたらいいかというマッチング促進のためのノウハウも必要となる。子どもが変わる、いきいきする授業づくりに参加したいが何から始めたらいいか分からないという時に参考にさせていただけるよう、打合せや単元に合わせることの重要性といったことを、事例を通して伝えられたらと思っている。</p> <p>NPOや事業者が学校に入る場合に、どのような事が求められているのか、どのような内容であればいいのかといった疑問点については、例えば小学校であれば「知識と身近な社会を結びつける体験型授業」など、指導要領の中で環境教育に関係のある部分から抜き出したキーワードを入れることで、小学校で授業を行う際のヒントになるのではないかと思うが、今後、委員の皆様や教育委員会と検討していけたらと思っている。</p> <p>インデックスはいろいろ付けなければならないが、どこから入ったら一番いいのかということの議論であったように思う。ガイドラインの導入部分について、学校向けは、情報源がどこにあるかということから入っていくのではなく、協働取組で環境教育を行うことで何が変わるのかということから入る、つまり、子どもたちや教員の変化から入った方がいいのか、それとも結果としてこうなったということ吹き出しのような形で表現したらいいのか。</p>
新海委員	<p>このガイドラインで全てを満たすことはできないが、このガイドラインを読んでほしいというコンセプトや特徴を前書きなどに書いておくといい。コンセプトや特徴は、打合せの重要性や提供側のメリットなど、連携・協働に伴う様々なポイントが、ヒアリングから得られた生の言葉で綴られていることが重要である。導入の部分にストーリー性があり、このガイドラインの特徴が読み取れるものであればよい。</p> <p>また、例えば、「生きものの授業をやろうと思っている先生へ」、「小学校の授業を通して地域貢献したい企業・NPOの皆さんへ」など、どのような方が読むと活用できるかということが最初に分かると良い。事例の順については事例のストーリーに合わせて作っていけば良い。</p>
浜口委員	<p>インデックスを付けるなど、様々な入り方があると良いと思う。例えば、何月にやりたい、何年生でやりたい、どのようなテーマでやりたいといったことがあり、そこから探すことができるようなインデックスがあると良い。</p>

千頭会長	<p>文字を減らして4コマ漫画などから事例に導くなど、導入部分を易しくすれば、事例の順番はどのようなでもいいのか。</p> <p>学校側、提供側、協働で生み出される成果という3つの切り口があり議論が尽きないが、皆さんにいただいた意見をどこかに入れることは大事である。</p>
岩崎委員	<p>どれだけ議論をしても完璧なものはいない。例えば、豊田市の事例も提供する側にとっては理想かもしれないが、使う側の学校で継承していくには丁寧すぎるかもしれない。何を作ったら良いかは、目的や必要とする人によって変わり、全てに応えることは無理である。小学校の事例が多いのは当たり前で、すべての発達段階が網羅されていれば、事例の数に偏りがあってもよいと思う。</p> <p>環境教育は生涯教育であるため、生まれてから死ぬまでみんなが何かに携わり、どうやっているかというつながりを話すことができればよい。学校ごとに何を求めているかも違うため、議論を全てにもっていくとまとまらないと思う。今、事例で出てきたもので中心的なものを揃えれば良いと思う。</p> <p>私はこれまでに学校で約500件の外部講師を呼んだが、ものすごく打合せをする。忙しいが、それは大変楽しい。普通の授業にないものがそこにあり、高校の教員が教えない事がある。専門家が来ると、毎回ではないが、これは素晴らしいということもある。</p> <p>学校も提供者に求めているところであれば本気でやるが、そうでないところは任せようと思う。それでもいいから、続けていくことが大事だと思う。</p>
事務局	<p>ガイドラインでは、基本的には協働・連携を推進するうえで重要なことを事例から導き出して、まとめに記載する。コーディネーターの事例などから、打合せが大事であり、そこで目的や状況をつかんでねらいを共有すること、また、学校の要望に合わせて調整する事、終わったら振り返りをする事などが重要であることが見えてきている。</p> <p>学校やNPOにとってどのような成果があったのかを導入で示していければと思っている。</p>
千頭会長	<p>提供者向けと学校向けは同じことを二つの切り口でくくりなおして見せるのか、組み立てが違うものをつくるのか、そこは確認しておきた</p>

事務局	<p>い。</p> <p>今までの議論では、事業者向けであっても学校側がそれをどう見ているか分からずに一方的にはできない、学校側としても相手側を見ずに学校側の要望だけでもできない、それは裏表の関係だと思うが、その点は確認しなくてよいか。</p> <p>提供者向けは、どのような効果があったかとか、効果的に実施するためのポイントなどノウハウを伝えるといった構成になると思っている。事例については、まとめに導いていくための説得力のあるステップを踏むための紹介となる。</p> <p>学校向けは、情報源のようなものになると思うが、集めた事例を取り入れ、さらにどのようにすれば子どもたちが成長するような学習が可能かといった要素を取り込んでいく。</p> <p>学校向けは情報源として使えるもの、それに対して提供者向けは啓発書のようなものになると考えている。</p>
新海委員	<p>協働取組の提供者向けのものは、学校と一緒に授業を作るときの特徴やポイントを知る内容が必須であり、導入では連携して協働で実施することで生み出されることが、まとめでは協働で実施したことで理解したこと、理解すべきことを書くこととよい。</p> <p>学校向けは、学校教育に民間の人が入ったことで、こんなに授業が変わるということが、事例は同じものだとしても教員や学校の視点で書かれると思う。</p> <p>導入では協働のポイントなど提供者向けのものと同じようなことを記述し、まとめでは学校の先生が外部講師を活かすためのコツやスキル、学校のルールを中心にまとめていくとよい。</p>
事務局	<p>今回作るガイドラインは、件数も少なく事例集とは思っていないが、事例を用いることで実感をもって伝えられると思っているので、皆さんの意見をもとに見せ方を工夫していく。</p> <p>また、他に良い事例があればご紹介いただきたい。また、学校向けの情報としてよいものがあれば併せてご紹介いただきたい。</p>